

幽 翁

平成23年11月12日(土)10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

別子開坑二百五十年史話につづき、人生と事業への生きた指針を与えてくれると愛読者の多い「幽翁」を解説します。住友関係者以外の人からも「わが生涯に数える絶賛の書の一つ」といわれる本です。

環境の世紀21世紀を100年前に先取りして実践した世界的な先駆者の伊庭貞剛のその人と生涯を学習します。

2. 本の刊行

昭和4年に資料収集に着手。

昭和6年に子息により刊行。翌年の7回忌で親戚知己に配布する。

昭和8年に広く頒布のために刊行。その後、版を重ねる。

昭和27年に版を新たにして再刊。

昭和49年に別子銅山記念出版委員会から復刻刊行。

昭和55年には、経済人叢書として榊原書出版社から刊行。

(新漢字表記で、なお注釈、解説が付いていてわかりやすい。)

昭和56年に泉会の発議で復刻再刊。

※各刊行本の最後に発刊の経緯が記載されていて参考になる。

3. 本の構成と内容

伊庭貞剛の生涯をメインにつづる。伊庭は、弘化4年(1847)に滋賀県八夫(実家は西宿)に生まれ、明治元年(1868)上洛、翌年より刑法官、司法省の役職を歴任し、明治12年(1879)に叔父の広瀬幸平の勧めにより住友に入る。明治14年(1881)に重役に列し、明治15年(1882)に大阪紡績重役、明治21年(1888)に大阪府立大阪商業学校校長などを歴任する。明治23年(1890)に第1回総選挙に滋賀県三区から立候補して代議士となる。同年に主家の友親、友忠の相次ぐ逝去により一切の公職を辞す。明治27年(1894)に別子銅山に単身で赴く。明治29年(1896)に別子銅山支配人になる。明治33年(1900)に総理事になる。明治37年(1904)に総理事の職を鈴木馬左也に譲り、滋賀県石山に引退する。大正15年(1926)に没。

—目次—

—内容—

〈流芳〉		世に伝えられる良い評判の数々
〈出生〉	先祖	伊庭家は近江源氏の支流
	家庭	弘化4年、伊庭家25代として生まれる 父は剛直な代官で教育者 母は広瀬宰平の姉
	立志	文久3年、西川吉輔に国学・尊王思想を学ぶ
〈行路〉	士官	明治元年、上洛、京都御所禁衛隊に入隊
	経営	明治12年、住友に入社
	山上	明治25年、大徳寺隆麿を15代家長に迎える 明治27年、支配人として別子に単身赴任
〈晩晴〉	帰臥	明治32年、大阪に帰任 明治37年、近江・石山に引退
	風懷	峯山との出会いからのありし日々を回顧する
	命尽	大正14年、79歳の大みそか 大正15年、没
〈拾遺〉		飄逸、洒脱の半面
〈年譜〉		

4. 伊庭貞剛の本の刊行推移

昭和6年	幽翁	西川正治郎	私版本
		翌年の7回忌に親戚知己に配布用として出版	
昭和35年	伊庭貞翁	神山誠	日月社
		幽翁で書き落している部分を補い、平易な文章で書き改める	
昭和61年	伊庭貞剛物語	木本正次	図書印刷(株)
		住友各社の生みの親だが、意外と知られていないので掘り起す	
平成10年	「幽翁」伊庭貞剛	感性文化研究所	黙出版(株)
		閉塞状況の現代日本に何を示してくれたか、死中に活路を開いた幽翁の雄渾たる生涯を14人がそれぞれに語る	
平成11年	伊庭貞剛物語	木本正次	愛媛新聞社から再刊
平成14年	住友の大番頭・伊庭貞剛物語	渡部一雄	(株)廣濟堂出版
		単なる別子銅山のストーリーで内容が薄い。貞剛の人となり不明。	
平成23年	伊庭貞剛小伝	末岡照啓	広瀬歴史記念館
		特別企画展の解説の小冊子として、環境対策の先駆者として紹介	
平成23年	CSRの先駆者・伊庭貞剛	末岡照啓	信州大学経営大学院
		環境対策の先駆者は、CSRの先駆者	

5. 表紙等の漢詩

表紙

植松迎皎月	松を植えて白い月を迎え
移竹待清風	竹を移してさわやかな風を待つ
一点無塵境	塵一つない清浄なところ
白雲生其中	白い雲がその中に生じる

表紙裏の竹の絵の賛

軒前備竹緑娑娑	軒前のたけし竹は娑娑に緑なす
玉立三竿不用多	美しい石を立てたり、三本の竿は用いずこと多し
好是満山風水夜	この満山の風水の夜を好のむ
慮心尽対亦無他	慮う心は向かい合うに尽き、また他に無し

大正乙丑初夏

幽庵主人罰古

※爛竹は寒竹か？

※大正乙丑は大正14年

※罰古は跋扈の意か？

裏表紙裏の蘭の絵の賛

短鋤掠出	短い鋤で地表を耕して幸をいただく
上淙草室	小さき主人は小さな草庵に住む (注)淙は王の名前

石山墨戯

詩序

百年名利弄英雄	百年の名利は、英雄をもてあそぶ
似鶴一声天地空	鶴の一声に似て、天地は空しい
花吊山中高士跡	花は、山中に高潔質朴人の跡を吊るす
青松影喪黙丹楓	活機園の青い松の影は、赤いカエデに黙ってきえる
石山為逝而一年四顧	石山いきてなお一年、四季に顧みる
峩慨無量謗共喜居之	今は亡き峩山は、無量になげき、ここにいたことを共に喜んだことをそしる

太拙居士

※太拙居士は河上謹一

6. 「流芳」の書き出し

寒山の「ト托幽居地、天台更莫言」にかない

幽居の地をト托す、天台更に言うことなし。

清閑な隠居の地をここに選び定めた。ここ天台山は隠居の地として申し分ない。

※寒山の詩の続きは、「猿啼いて溪霧冷やかに、岳色草門に連なれり 葉を折
りて松室を覆い、池を開きて澗水を引く 己に万事休むに甘んじて、蕨を
采りて残年を渡る」

伝燈第二十二祖の「心随万境転、転処実能幽」の妙機に契合す

心は万境に随いて転ず、転ずる処まことによく幽なり。

心はいろいろな環境の変化にしたがって変化するが、転じた先のこの地では本当に
身も心も深く静かでいられる。

翁が「万物本来空、誰知真道骨、乾坤莫始終、唯問天辺月」の五絶がよく示しておる

万物は本来空である。まことの仏法の奥義を誰が知ろうか。天と地に始まりも終わ
りもない。ただ空を見上げて天の月に問いかける。

7. 伊庭貞剛の生涯を概説

<出生> 致良知

弘化4年(1847)

今から176年前の弘化4年(1847)1月5日に、琵琶湖の東岸の八夫村(現在の野洲市)の北脇家で、伊庭貞隆と田鶴子の長男として伊庭耕之助が生まれた。(父の貞隆は癩癩持ちで、田鶴子は実家の北脇家で産む。)

ちなみに、広瀬幸平は田鶴子の実弟。

嘉永6年(1853)

耕之助が7歳になって初めて伊庭家に帰る。

文久元年(1861)

児島一郎道場に入門して剣道を学ぶ。(20歳で免許皆伝。)

文久3年(1863)

西川吉輔(一よしすけ、ふとんの西川の分家)の「帰正館」に入り国学・尊王思想を学ぶ。

西川は、長崎との交流や近江商人のネットワークによって当時の外国情報を咀嚼していました。伊庭の終生変わらない「事に当たりて、身を挺して向かうという強い意志」は、陽明学の思想の影響です。湖西小川村(現在の高島市)出身の陽明学者で、近江聖人と仰がれていた中江藤樹に傾倒していました。行動指針は「致良知」。

致良知 陽明学の主要命題。陽明学は、明の王守仁(王陽明)が興した学問。

人は生まれながら持っている良心を信じて行動する考え。

人間の先天的、道徳的、知覚的判断力を發揮せよという説。

自己の固有する、是非善悪を直覚的に弁明する心の作用が「良知」であり、その良知に従って、物事に対処し、かつその対処を通じて、良知を顕現させるのが「致良知」

「良知」は孟子が唱えたもの。「尽心上篇」

「良知に生きる」姿勢は「知行合一」であり、その行為は「明明徳」

近江八幡 東海道と中山道の分岐点 情報が行き交う所

琵琶湖は水上交通の要所

坂本

大阪・京都 ——— 大津 ———+————— 長浜 ——— 日本海

安土 ——— 江戸

近江商人 売り手よし、買い手よし、世間よし → 三方よし

<行路> 君子財を愛す

明治 元年（1868）

師・西川吉輔の求めに応じ京都御所禁衛隊に入隊。

「どうぞ50歳になるまで私にお暇をいただきしてください。」と母に告げる。

（父は伯太藩にとどまり、家に弟妹4人が残っていた。）

明治 2年（1869）

京都御留守刑法官少監察に就任。弾正台京都支部巡察属に任命。

弾正台巡察属のときに、兵部大輔・大村益次郎が暗殺される事件が起こる。大楽源太郎（だいらく ーーー）が開設の私塾・敬神堂（別称・西山書屋）の門下生の神代直人、団紳一郎らが犯人だった。正式な手続きを取らずに死刑を執行しようとしたことを非とし、粟田口の刑場に赴き、斬罪を止める拳にでる。

その後、司法省検事、

明治 4年（1871）参議・広沢兵助の殺害で大楽源太郎を九州に追及。

明治 7年（1874）函館裁判所副所長、

明治11年（1878）大阪上等裁判所判事を歴任。

「自己の生きてきた足跡を残さないのが人生最高の生き方である」の信念

明治11年（1878）12月

西南の役後、明治維新の自由闊達な気風は消え、天下・国家を考えてきた伊庭は、信念を曲げて媚びへつらう官界に失望して辞職。

明治12年(1879)2月1日

故郷に帰り村長にでもなろうと叔父・広瀬幸平を訪ねたところ、民間の会社でも国の役になる仕事はいくらでもありと熱心に勧められて住友に入る。月給40円は裁判官時代の100円の半分以下、「**公利公益**」の**住友事業精神**にほれ込んだの決意。

33歳。

広瀬の勧誘時に伊庭貞剛が感じ取ったのは、その後に座右の銘にした「**君子財を愛す。これを取るに道あり。**」です。東嶺禅師の「宗門無尽灯論」という本の中にあり、たまたま読んでいた。

「君子即ち経済人が財を愛す」とは、宇宙・仏からの預かりものの財を、今日の使い捨てるの思想でなく、もったいないとの精神で、財を愛し、物心一如の心で接すること。

「これを取るに道あり」とは、商売は堅実第一で暴利を貪るな、浮利に走るな、道筋を通せということ。

お金のもうけ方には道があり、人の道に反してはいけない。正々堂々、理にかなうもうけ方をしよう。そしてもうかった金は、ちゃんとした使い方をしよう。

信用を重んじ、確実を旨とする住友の事業精神と感ずる。文殊院趣意書きに始まる。従来の家訓を整理して、明治15年に家法を定める。

白隠禅師が著書「息耕録開演普説(そくこうろくかいえんふせつ)」で紹介する。一連の話の出展は「五家正宗賛(ごけしょうそうさん)巻4、洞山暁聡禅師の項。

暁聡が師の文殊に会ったときのこと、師は大衆に問いかけた。「直鉤(ちよっこう)は顎に珠をもつ黒い龍を釣る。曲鉤はガマかミミズを釣る。いったい、龍はいるか。」しばらくして師が「労して功なし。」といわれるのを聞いて、暁聡はすぐに悟るところがあった。

暁聡は、雲居寺らの寺の灯明係りをしていたとき、ある僧が「泗州の大聖が近頃揚州に出現したのだろうか。」と言って、みんなに尋ねた。「泗州の大聖が何の為に揚州に出現したのだろうか。」。暁聡が言った、「君子財を愛する。これを取るに道がある。」

中国の語録「林間録」「禅林僧宝伝」「五灯会元」などにも、日本でも白隠禅師の「槐安国語」「毒語心経」などにも随所に引用されている。

剣道、国学、司法界で培った**才能と教養・寛容な人格**により次第に周囲の人望を集る。

(河上謹一、吉田茂は、「春風」と初対面の印象を評した。)

10月に初めて別子銅山を視察。

明治13年(1880)

本店の支配人。

五代友厚、山本達雄らと私立大阪商業講習所(後の府立商業高校、大阪市立大学の前身)を設置。

明治14年(1881)

重役になる。

明治15年(1882)

大阪商業講習所の所長。

大阪紡績(東洋紡の前身)を設立。

(法律専門家として、家法制定にも関与したであろうと推測される)

家法前文

「予洲別子山の鉱業は、万世不朽の財本にして、その業の盛衰は、わが一家の興廃に関し、重かつ大なる、他に比すべきものなし。ゆえに旧来の事跡に徴して、将来の便益を謀り、益盛大ならしむる事。

わが営業は確実を旨とし、時勢の変遷、理財の徳失を計りて、これを興廃し、苟し
も不利に趨り、軽進すべからざる事。」

参考

文殊院趣意書

商事は言うに及ばず候えども、万事情に入らるべく候。

一、何にても常の相場より安き物持ち来たり候えも、根本を知らぬものに候わば、少しも買い申すまじく候、左様の物は盗物と心得べく候。

一、何たる者にも一夜の宿も貸し申しすまじ。また編笠にても預かるまじく候。

一、人の口合い、せらるまじく候。

一、掛商い、せらるまじく候。

一、人何ようの事申し候とも、気短く、言葉あらく申すまじく候。何様重ねて、具に申すべく候。以上

孟春十日

草名(花押)

明治17年(1884)

大阪商船会社を設立。

明治20年(1887)

活機園の土地を購入。

別子山上の演説(家長・住友友親の随行)

「そもそも諸子が初めてこの山に来たるや、決して偶然にあらず、必ず目的あり、目的とは何ぞや、即ち勤勉以て国家を益し、節儉以て己が栄光を計ること、是なり。」

(働くための意義を言っている)

明治21年(1888)

府立大阪商船学校の校長。

明治22年(1889)

市立大阪商業高校(大阪市立大学)の校長。

明治23年(1890)

第1回衆議院議員選挙で、滋賀県第三選挙区から当選。(住友家12代友親・13代友

忠の死去により、翌年に公職を辞任。友忠の養育係であった。)

友達の橋本峨山和尚は「衆議院議員ご当選の由。さだめてご迷惑と存じ候。」と手紙に書き、そして、「あなたに向かないから、早くおやめなさい」と言っている。

明治25年(1892)

徳大寺隆麿(15代家長・友純)を住友家の婿養子に迎える。

明治26年(1893)

惣開製錬所からの亜硫酸ガスで煙害問題が発生、暴動となる。

人 心、自 然 を 回 復 (植 林)

明治27年(1894)

別子銅山の紛争解決のため、だれも行く手がない中を鉱業所支配人として単身赴任。

「一身密かに覚悟を定め、妻を捨て、子を捨て、家を捨て、家計を捨て、一身を捨てると、はじめて自由活発な境地に達することができ、別子に付いた『虫』くらいは何とかなるだろう。」と覚悟を語る。

別子赴任時、橋本峨山から臨濟録を渡され「お前の骨は拾ってやる」と言って送り出された。(臨濟録は、すでに由利滴水から手渡されて読んでいる。唐代の臨濟の法語集。「自分を知れ、自分を見失うな。」)

「小生は馬鹿な仕事が好きなり」と、ただ銅山を登ったり降ったり。

(後から来た奥さんに語り、品川弥二郎に書く)

重役と職員、職員同士、会社と農民、それぞれ意志疎通を欠いた人心の荒廃が原因と見抜く。

別子の大造林計画を立てる。毎年100万本以上の植林を敢行。それまでの植林は平均で年に6万本でした。植林に心血を注ぎ6年間で482万本を植栽。(後に「わしの本当の事業と言ってよいのは、これである。わしは、これでよいのだ」と語っている。)(植林は五良津山からはじめ、七番山とつづき全山へとひろげる。)

「このまま別子の山を荒蕪(こうぶ)するに播かせてくことは、天地の大道に背くのである。どうかして濫伐のあとを償ひ、別子全山を旧のあおあおとした姿にして、之を大自然にかえさねばならない。」

明治27年	117, 150本
明治28年	275, 000本
明治29年	409, 200本
明治30年	1, 217, 001本
明治31年	1, 353, 605本
明治32年	1, 450, 930本
合計	4, 823, 364本

「山が険しすぎて・・・切れ立っていて、土地もない岩肌ばかりです。とてもあん

なところへは植えられません。」

「それなら小さい石垣をいくつでも築いて土留めして、それから土盛りして植えるのです。枯れても構わんし、流されてもよろしい。何度でも、懲りずに植え続けるのです。根付くまで、根気よく植えるんです。」

明治27年～昭和25年 4,863万本

明治27年～昭和42年 10,285万本 約1億本

初代総理事・広瀬幸平の引退に伴い、別子支配人在勤のままその地位を引き継ぐ。住友の近代化に着手。

四 阪 島 移 転

明治28年（1895）

煙害防止のため、山根製錬所を閉鎖。

尾道支店で住友家最初の重役会議を開催し、住友銀行設立を決議。（合議制）

住友銀行設立。

四阪島を個人名義で買い取る。

「製錬所に不適地だったらどうします。」

「梅でも植えて名所にするよ。」

明治29年（1896）

別子銅山の煙害克服のため、四阪島移転上申書を家長に提出。（将来の買鉱製錬も視野）

家長・友純の考え「家名をまもるとは、地域住民となかよくすること。」

↓

鷲尾勘解治の共存共栄

「重役が生命をかけて判を押さねばならないような書類は、一生に二度か三度あるかないかというくらいのもんだ。五度もあったら多過ぎる。その二度か三度を間違ひなく押せたら、会社からいくら好遇をうけてもいいよ。」

住友家理事兼別子鉱業所支配人。

明治30年（1897）

四阪島製錬所建設に着手。

総理事心得。

住友伸銅場（住友金属・住友電工・住友軽金属の前身）を設立。

明治31年（1898）

別子鉱山山林課（住友林業の前身）を再設置。植林本数135万本。

<晩晴>

活 機

明治32年（1899）

住友倉庫を設立。

別子支配人の職を鈴木馬左也に譲り、新居浜を離れる。

五十年の 跡見返れば 雪の山 (伊庭貞剛)

月と花とを 人に譲りて (品川弥二郎)

「難事には自ら率先して事に当たり、難事去れば自ら退いて後任に譲る。」

日銀を辞職した川上謹一ほか数名を住友に招聘。

- ① 住友を世界の住友にする
- ② 大阪経済界の近代化

別子大洪水発生。

明治33年(1900)

二代目総理事に就任。

「最高の位に就いた者は、長くその位置に止まるべきではない。」との信念。

別子開坑200年を記念し、皇居前に楠公銅像を献納。

明治34年(1901)

足尾銅山の鉍毒問題を糾弾した田中正造も第5回帝国議会での演説で、住友の四阪島への製錬所移転を賞賛した。

「伊予の国の別子銅山は、第一に鉍業主は住友である、それ故社会の事理(ことわり)・人情を知っている者で、己が金を儲けさえすればよいものだと云うような、そう云う間違いの考えを持たない」

植林本数227万本。以後200万本前後を植林。

明治35年(1902)

第三通洞貫通。

明治37年(1904)

雑誌「実業の日本」に所感録「老成と少壮」を発表。(退職の辞に当たる。)

「事業の進歩発展にもっとも害するものは、青年の過失ではなく、老人の跋扈である。老人も青年も共に社会の勢力に相違ないが、その役割をいふと、老人は注意役、青年は実行役である。」

翌年から四阪島製錬所が創業開始することを確認して、総理事を鈴木馬左也に譲って引退する。石山別荘の活機園に隠棲する。58歳。号を「幽翁」とした。

「最高の地位、最高の給料を受ければ、久しく止まるべきでない」との信念。

活機園を建設。設計は野口孫市。(野口は大阪府立中之島図書館、須磨別邸、日暮別邸、心齋橋などを造る。)

活機とは、世俗を離れながらも人情の機微に通じるとの意味である。

家屋の木材は、別子職員一同から餞別として贈られた木材を用い、別子在勤の記念とした。

明治38年(1905)

四阪島製錬所が操業開始。

(起業資金は別子純利益の2年分 173万円)

第三通洞から瀬戸内海まで全長16kmの坑水路と収銅所が完成。

明治45年(1912)

端出場水力発電所が完成。

大正11年(1922)

四阪島海底ケーブル敷設。

大正15年(1926)

10月23日に没。数え80歳。法名「聴松軒幽翁正念居士」

いつも「事業というものは、現実問題がつきまとうが、理想という大きなビジョンを忘れてはならない」と語っていた。

「植林こそが、私のほんとうの事業」と晩年に語っていた。

8. おわりに

格言

事業の進歩発展にもっとも害するものは、青年の過失ではなく、老人の跋扈である。老人も青年も共に社会の勢力に相違ないが、その役割をいふと、老人は注意役、青年は実行役である。

言葉は八分でとどめて、後の二分は、向こうで考えさせるがよい。分かる者には言わずとも分かるが、分からぬ者には、いくら言っても分からぬ。

人の仕事のうちで一番大切なことは、後継者を得ること、その仕事を引き継がせる時機を選ぶことである。

このまま別子の山を荒蕪(こうぶ)するに播かせてくことは、天地の大道に背くのである。どうかして濫伐のあとを償ひ、別子全山を旧のあおあおとした姿にして、之を大自然にかえさねばならない。

もしその事業が本当に日本の為になるもので、しかも住友のみの資本では到底成し遂げられない大事業であれば、住友はちっぽけな自尊心に囚われなくて、何時でも進んで住友を放下し、日本中の大資本家と合同し、敢然之を造上げようという雄渾なる大気魄を絶えず確りと蓄えて居なければならない。

意義

20世紀型の環境問題の取り上げ方は、環境問題を何とかしないと大変だとか、地球資源には限りがあるとの告発の警告でした。

告発が最重要である時代は終わりました。問題の構造は明らかだからです。大変だと騒いでいるだけでは、何も問題は解決しません。いま重要なことは、ではどうすればいいか、です。環境問題の基本的問題は、3つ。①多量の廃棄物の発生、②地球温暖化、③化石資源の枯渇。そして、3つの問題を同時に解決していく必要があります。

今の生活水準を維持しながら世界が成り立って行く解決が必要であります。(前東大総長・小宮山宏)

伊庭貞剛は、100年前に、銅製錬をつづけながら煙害をなくすことに挑戦しました。鉱業と農業の共存を迫り、国家の進展と国民生活の維持を同時に解決する道を切り開いた最初の人です。その考えを継続するために人材を育成し、未来を託しました。その精神は100年後になっても、京都議定書に明記の内容であり、いま前・東大学長の小宮山宏の述べるところです。

50年前に南フランスのプロヴァンス地方を舞台とした小説「木を植えた人」を書いたフランス人、ジャン・ジオノよりも50年早い緑化の実践者です。自然との共生や対立を超える考えは、生かし生かされているとの禅哲学に起因しています。

昨今の事業仕分けの「2番ではいけないのですか。」の考え方とは雲泥の差の精神です。修士から4年半を費やした実験に置いて試行錯誤して取りためたデータは、途中で標準温度の変更があったのを知らずに取ったものでした。自分の頭で考えた研究だったので、4ヶ月でデータを取りなおしました。これは、モデルがあって追いかけるのと、自分でモデルを創って行くトップランナーとの質的差です。1番の質とは、こんなにも重要なことです。

西洋の産業革命から100年の遅れを20年から30年で追いつき、世界のトップランナーに入った日本が、すぐさま自分で考えて、自分でモデルを作った人でした。その物語の舞台が新居浜でした。

小宮山の話をもう一度聞こう。

いま日本が抱えている少子高齢化、エネルギー、環境問題は、これから世界全体が遭遇する課題です。先頭に立って課題解決先進国として未来を切り開く世界史的役割が日本に課せられています。それによって世界は日本に敬意を払うことでしょう。

東日本の震災で原子力発電所が自然によって破壊されました。これまでに人類が経験した中で最大の原子力発電所の事故です。伊庭貞剛から100年後の私たちが、解決しなければならぬ難問ですが、彼に学び解決しなければなりません。

今年度の予定 2月18日(土) 10:00~11:30 別子鉱山目論見書1部・2部

表紙裏の竹の絵の賛

軒前憺竹緑娑娑 軒前のたけし竹は娑娑に緑なす ※爛竹は寒竹か？
玉立三竿不用多 美しい石を立てたり、三本の竿は用いずこと多し
好是満山風水夜 この満山の風水の夜を好のむ
慮心尽対亦無他 慮う心は向かい合うに尽き、また他に無し
大正乙丑初夏 ※大正乙丑は大正14年
幽庵主人罰古 ※罰古は跋扈の意か？

表紙裏の竹の絵の賛

軒前憺竹緑娑娑 軒前のたけし竹は娑娑に緑なす ※爛竹は寒竹か？
玉立三竿不用多 美しい石を立てたり、三本の竿は用いずこと多し
好是満山風水夜 この満山の風水の夜を好のむ
慮心尽対亦無他 慮う心は向かい合うに尽き、また他に無し
大正乙丑初夏 ※大正乙丑は大正14年
幽庵主人罰古 ※罰古は跋扈の意か？

表紙裏の竹の絵の賛

軒前憺竹緑娑娑 軒前のたけし竹は娑娑に緑なす ※爛竹は寒竹か？
玉立三竿不用多 美しい石を立てたり、三本の竿は用いずこと多し
好是満山風水夜 この満山の風水の夜を好のむ
慮心尽対亦無他 慮う心は向かい合うに尽き、また他に無し
大正乙丑初夏 ※大正乙丑は大正14年
幽庵主人罰古 ※罰古は跋扈の意か？